中國に於ける農業集團化の運動

——互助組と合作社——

北山康夫

一

中國では宋代以後小作制度が普及發達し、地主層から官僚が選出され、ここに天子を中心とする中央集權制度が確立した。その後いろいろの政治的變動があったが、この社會組織は變らなかった。太平天國のような地主支配に對する反抗もあったが、牢固たる封建制度そのものは如何ともすることができなかった。[1]

然るに新中國に於ける土地改革は、この長き傳統をもつ地主制度を根絶した點に重大なる歴史的意義をもっている。中國の農村は根本的に變貌した。今や農村では人口の七割を占めていた貧農・雇農は一割乃至二割となり、二割を占めていた中農は八割となり、地主は全くその姿を消してしまったのである。「耕者有其田」のスローガンが實現され、地主に代って中農が農村の實權を握った。[2]

然し中國に於ける土地改革は決して一朝一夕になったのではない。その間に相當の迂餘曲折を經ているのである。いうまでもなく、中國の土地解放は北伐のころに始ったのであるが、[3]國共分裂の後中國共産黨は江西・湖南・福建・湖北・陝西・甘肅の地方で、ソヴィエット政權を樹立した。これらの地區では徹底的な土地改革が實施された。その後中日戰爭の勃發と共に統一戰線を結成するために、地主の土地沒收を中止し、減租減息の政策を實施した。抗日戰爭の終了は事態を一變した。共同の敵日本が敗北したことは、國共兩黨の對立を激化し、華北の地方では農民は決起して土地沒收を開始した。ここに於て中國共産黨は一九四六年

五月四日、「五四指示」を出し、華北・東北の廣大なる地方で土地改革が始った。丁玲の描く「太陽は桑乾河を照す」の土地解放闘争は實にこのころの出來事であった。

當時農民は地主のみでなく富農の土地をも沒收した。やがて一九四七年十月「土地法大綱」が發表され、これによって土地改革の方針が明確になった。大綱に於ても、地主の土地財産の沒收だけでなく、富農の餘剰の土地財産の沒收を規定している。[4] 華北・東北の地方ではこの規定に從って土地改革が實施されたのである。

然しその後中國の革命は壓倒的勝利のうちに終了した。事態はまた一變したのである。ここに於て人民政府は一九五〇年六月從來の「土地法大綱」に重大なる修正を加え、「土地改革法」を實施した。修正の加えられた點は主として富農の取扱いであり、「土地改革法」では富農の財産を保護し、一定範圍内に於ては小作地の所有まで認めたことである。[5] この點について劉少奇は、國内戰爭中は人民の力が弱く勝敗はどちらとも判らなかった。富農は人民の勝利を信頼せず、地主の側に傾いた。同時にこの戰爭は人民に多大の犧牲を要求した。從って當時に於ては富農の土地財産の沒收をも許し、貧農の要求を最高度に滿足させる必要があった。然し革命の勝利した現在に於ては情況は一變した。今や經濟建設が基本的目標である。そのためには、富農を保護し富農を動員して經濟の復興を行うことが急務であると說明している。[6] 以後この「土地改革法」に從って農民的土地所有が實現されたのである。

以上のように、中國の土地改革は決して同じ方式に從って實施されたのではない。比較的早い時期に實施された老解放區と新解放區では實施後の狀況もちがっているようである。然し何れの地方でも封建的地主層は根絶され、土地なき農民が土地を所有するようになり、過去の農村はその姿を一變した。その上中國に於ける土地解放は激烈なる階級闘爭を以て實現されたので、その結果として地主に代って農民が政治の實權をも握ったのである。

二

土地改革が實施され農民が土地を所有するようになった。然し彼らは役畜・農具を持っていないし、勞働力も不足していた。この困難を打開するために、生れたのが互助組で

あった。互助組は古い中國の習慣から生れ、またソヴィエット時代の經驗にもとづくものであるが、現在中國で行われているのは臨時的互助組と長期的互助組の二種類がある。臨時的互助組は主として農繁期にのみ行われるもので、概して小型のものが多い。長期的互助組は一年を通じて行われ、臨時的互助組の一層發展したものであり、小規模の公有財産をもつものもあり、一層强固な互助組である。一九五二年十月の報告によると、互助組に組織されている農民は華北で六〇パーセント、東北で七〇パーセント、華東・中南・西南地區では二五パーセントから四〇パーセントであるといわれ、解放の早かった華北・東北地區は先進地域である。[7] 又昨年七月の鄧子恢の報告では全國で四〇パーセントの農民を組織し、その中の三分の二は臨時的互助組であるという。[8] 互助組の一層發展した農業生産合作社は全國で約一萬個、ソヴィエットのコルホーズに比定される集体農莊は現在のところ二十數個である。

互助組は自願互助・等價交換・民主管理の原則に基いて運營されているが、その中で一番問題になるのが等價交換である。等價交換というのは勞働力・役畜・農具の價値を適確に評價し、適正な支拂・交換を行うことである。勞働力の評價については「中共福建委農村工作委員會農業生産科」(農業生産互助組參考資料第一集所收)の報告によると、次の四つの方法がある。

(一)工換工。

これは最も簡單な方法であって、勞働力の强弱・技術の高低・勞働の成果に拘わりなく、一日の勞働を一率に一勞働日と算定する。これは普通臨時的互助組で行われているが、この方法によると女子や兒童は參加できず、計算の基礎が不公平であるから問題を起し易いという。

(二)按勞定分。

これは勞働の强弱・技術の高低・勞働の性質に從ってあらかじめ各人の勞働工分を決定しておき、これに從って算定する方法である。例えば李は十分、張は八分、王は十一分というように。これは臨時・長期の互助組を通じて行われているが各人の勞働工分がはじめから決定しているので、勞働の積極性を鼓舞することができない。

(三)死分活評。

これは先の按勞定分の缺陷を補った方法であり、あらか

じめ各人の勞働工分は決定しておくが、なお一日の仕事の成果を評價してこれを加味するのである。今までの方法に比べてより合理的であるが、一面に於て仕事の評價は相當面倒であり、毎日の仕事が終ってから直ちに評價決定しなければならない。

(四)按件論成計工。

これは例えば一畝の田植をすれば十勞働分、五畝の田であれば五十勞働分とし、更にこれに參加した各人の働きを評價して勞働工分を決定する方法である。勿論この方法は最も進歩したものであるが、同時に複雜であるから既に相當評價に習熟した後でないと實施が困難である。

以上が大体各地の互助組で行われている勞働力の評價計算の方法である。人間の勞働力のみでなく役畜の場合も勞働工分を決定する。[9] そしてこれらの勞働分を決算する方法としては、記帳による場合と工票による場合がある。記帳によるというのは毎日の各人の勞働工分を帳面に記入しておくのであるが、工票による場合はあらかじめ三百分又は二百分の工票を各人に分配しておく。工票は普通一分・二分・五分・十分の四種類があり、竹・紙・木などでつくる。各工票には番號をつけ、組長の印をおしておく。廣西省の蔣在球の互助組の工票は、竹で作っているが、その長さは三指長、寛さは兩指であるという。各人が他人の勞働の援助を受けたとき、この工票で支拂っておき、一定の期間を經過すると、組員が集って決算するのである。この方法は頗る簡單であり、文化程度の低い農民には、最も喜ばれているらしい。湖南省の任貴芳互助組で、この工票制度を實施したとき、一農民が「前には勞働工分は帳面に書いていたので、どうも不安だった。今は工票をチャンと自分の手にもっているんだから、安心できるし、ごまかされる心配もない。」と云って喜んだという話がある。[10]

互助組の食事の問題も、厄介なことだった。古くからの習慣に從って食事は全て雇傭者の家で準備していたが、それでは段々ゼイタクになり貧しい人はそのために苦しんだ。それで各家庭で食事をとることにしたが、それでは仕事の時間がまちまちになる惱みがあった。それで現在では、朝晩は各家庭で、晝食のみは共同炊事をしている互助組が多いようである。農民たちは色々工夫をこらし、經驗を交換し合い、無理のない便利な方法を案出し、漸次互助組は軌

道にのりつつあるようである。[11]

以上は大体互助組の運營について述べて見たのである。次には互助組の一層發展した農業生産合作社について述べて見ることにしよう。

農業生産合作社では、その規模は一層大となり、社員は土地を入股するので土地の境界をなくしてしまい、又互助組のように勞働に對する支拂を行わず、社員は入股した土地と提供した勞働力に比例して、收穫の分配を受取るのである。農業は一層集團的大農法となり、機械の使用も多くなる。各人が土地を提供して境界をなくするのであるから、全く革命的な變化といってよい。而もこのような合作社は東北地方では今から五年後には基本的な形態となるというのであるから驚かざるを得ない。[11]

さて合作社を組織するには先ず土地の入股を行わねばならない。土地私有の頑固な思想をもつ農民を指導して、その愛着する土地を提供させるのは決して容易なことでない。一九五一年の春、有名な山西省平順縣郭玉恩の合作社のできたときの話である。愈々土地を入股することになったとき、一部の者は全部の土地の入股を主張し、一部の者は大部分の土地を提供し、殘りは個人のもとに殘しておくことを主張した。然し討議の結果、少くとも所有地の七割を提供し、三割以上は殘留することを許さないと決定した。然し更に問題が起った。一部の者はその所有する良好なる土地を提供したが、多くの者はやせ地・小塊地を出して、よい土地は手許に殘しておこうとした。そこで再び討議を重ね、入股するものは全て大塊地とし、小塊地の場合は大塊地としてまとめることのできるものに限ることとし、更に土地の質については、良い土地の半分は提供することに決定した。土地入股の問題は解決した。次に起ったのは土地に對する配當と勞働に對する配當をどうするかということであった。土地の多い者は兩分することを主張し、土地の少い者は勞働に對する配當を多くするように主張した。これは切實な問題であり、土地多くして勞働力の少い者と、土地少くして、勞働力の多い者との利益が對立したのである。結局この問題は土地に對する配當四〇パーセント、勞働に對する配當五二パーセント、そして殘りの八パーセントは公積金とすることで解決されたという。[12]

この郭玉恩合作社結成の過程は、よく合作社の問題點を

具體的に提起しているようである。即ち合作社の經營で最も問題となるのは、土地と勞働とどちらにウェイトを置くかということである。合作社はあくまでも土地私有の基礎の上に立っている。從って土地所有者の利益を無視することができない。同時に土地にウェイトを置きすぎると貧窮農家が搾取される結果となる。從って兩者のバランスを充分に考慮して、その割合を決定しなければならない。現在のところ郭玉恩合作社の場合のように、或る程度勞働にウェイトを置くことが正しいとされ、そのように指導されている。その方が貧農に利益であり、且つ勞働の積極性を高めるからであろう。

さてこの合作社は土地入股も終り、二つの互助組を基礎として十八戸の農民を組織して發足した。然しそのとき今一つの大きな問題にぶつかった。それはどのように勞働を組織するかということであった。從來の互助組では、その點は問題にならなかった。傭われた家の田で働くのであるから仕事はあらかじめわかっているからである。合作社の場合はそうは行かない。社長の郭玉恩が一々指圖しなければならない。仕事を割當てても、「自分はそんな仕事に適しない。」とか「そこは少し遠すぎる。」とかいって仲々決定しない。毎日太陽が高く昇ってから仕事にとりかかるということが多かった。このようにしてこの年の春耕は混亂に陥り、漸くのことで播種が終るという有様であった。

春耕が終ってからこの問題がとりあげられた。そしてその結果として、十八戸の社員を二組に分け、各々組長を設けると共に、土地の一半を責任をもって擔當することにした。全體の計畫は社長が立て、これを組長に傳え、組長はそれによって組員の仕事を割當てるのである。この結果仕事は從來よりスムーズに進行するようになった。

一九五二年春、郭玉恩の合作社は十八戸から四十八戸に發展した。それでこの機會に社員を五組に分け、組長を設け、土地を五つに分けて各組の分擔を決めた。然しこの場合にもなお社員の活動は充分積極的でなかった。丁度このとき、中共平順縣委員會で包工制を提唱したので、早速これを實施することにした。包工制というのは請負制度であり、定工・定量・定質・定時のことである。定工というのは土地の遠近・好惡に從って毎畝必要とする勞働量を算定することであり、これによって各組に責任量を割當てるの

が定量である。定質は仕事の質を規定することであり、定時というのは一定の時期までに仕事を完了することである。各組の組員は分擔した土地の仕事を定時に定質に完了する責任を負うわけである。この四定包工の制度を實施してから各組の勞働の能率は一層向上した。然しこの年の七、八月頃のことであった。眞夜中に大雨が降り畑地にどんどんと水が流れこんだ。目をさました郭玉恩が現場に行って見ると誰も來ていない。やっとみんなを起して處理したことがあった。又農作物が虫害を受けたときも組員は無關心であった。この經驗に徵して一九五三年からは更に定產制を實施することに決定した。各組の生產豫定額を決定し、責任をもって收穫をあげさせるのである。[13]

以上は郭玉恩の合作社について述べたのである。數千年來の傳統である個人經營を集團經營に進めることが、決して容易でないことがこの實例をもってしても明らかである。然し今や合作社は試驗の域を脫して現實の課題となりつつあることは注目しなければならぬ。土地改革の實施された農村では、今や着々としてこのような變革がなされているのである。互助組や合作社は初期の生產の隘路を打開するためでなく、今や仕事の能率をあげ農產物の增產のため、そして又社會主義的農業への道程として、積極的に推進されているのである。農民は單幹（個人經營）は洋車、互助組は汽車(自動車)、合作社は火車（汽車）を合言葉としているという。

三

さて土地改革にひきつづいて互助組・合作社の運動が展開されているのであるが、それは既に述べたように決して容易なことではない。山西省のある互助組で調査したところでは、四十四戸の組合員が互助組に參加した動機は、

(一)眞に組織に加って技術の向上と增產を希望したもの、十戸。

(二)互助組は國家の命令であり、參加しないと政治的に孤立することを恐れたもの、十一戸。

(三)生產上の困難を打開するために參加したもの、六戸。

(四)互助組に入ると人を傭うのが便利で、賃金の支拂はおくれてもよいから、六戸。

(五)土地少く勞働力が多いので仕事を求めるため、三戸。
(六)只名義だけで參加しているもの、八戸。

であったという。眞に政治的な自覺をもって互助組に參加したのは十戸である。これが僞らざる農民の實態であろう。[14]

湖北省大名の互助組では勞働力の多い者は、互助組に參加することは他人のために勞力奉仕をすることだといい、又土地の多い者は賃金が高くて損だといい、特に中農や富裕戸は「自分で働いて自分で食べる。それこそが自由自在というものだ。うんと食べていいものが着られる。これこそ安樂神仙だ。」といって獨立經營に强い愛着をもち、仲仲互助組に參加しないという。合作社の場合も同樣である。[15]土地少くして勞働力の多い者、土地多くして勞働力の少い者の間の調節をとることが非常に困難である。勞働力の不足、農具・役畜の缺乏のため生產上の困難があった頃はなお互助組の組織も容易であった。互助組が必要であったからである。然し一應生活も安定し、その必要性がなくなってくると團結が弛緩してくる。互助組の發足の早かった山西省地方ではその傾向が强かった。[16]抗美援朝に伴って展開された農業增產運動が、この互助組に活を入れたことは事實である。生產の困難を打開するための互助組から增產のための互助組へと高めることは容易でないのである。

新解放區に於ても色々の問題が起っている。湖北省襄陽附近の農村で起った現象であるが、この地方では土地解放が行われてからまだ間もないので、貧農・雇農には貧しいのが名譽だと考える思想があり、地主は再び沒收されることを恐れ、富農は地主と見られることを恐れ、農村には一般に生產しても何もならないという考が普及している。中農の陳玉海という男は百五十斤の大豚を殺して一斤も賣らずに食ってしまひ、一石二斗の高粱酒を呑んでしまった。一方社會主義に對する誤解も行われている。保康縣六區の幹部晁文道の父は三匹の牛のうち二匹を賣り拂い羊を買った。羊を一匹づつ殺して食う算段である。襄陽縣の黨學校で學んでいる幹部たちの多くは、「間もなく社會主義になるんだから何も買う必要はない。大いに食べて大いに呑むがよろしい。」という手紙を送り、又劉陽という女は、今まで毎年三、四十斤の糸を紡いでいたが、今年は只五斤しか紡がなかった。ある人が何故紡がないのかというと、「私はもう進步したんだ。遠い將來を見越しているんだ。」

と答えたという。[17] 人民政府の強力な指導の下に土地改革が行われたところではこのような傾向の現われるのも無理はない。農民達は長い間憧れていた自作農になったのである。自分の土地で働く農民になったのである。彼らは現在の生活に滿足している。この農民を指導して、農民たちにとっては窮屈な面倒な互助組に參加せしめ、又その土地を提供させるのは決して容易なことではない。農民の政治的自覺を高めることと、協同作業を通じて增產を實現することによって始めて可能となるのである。鄧子恢が、「土地改革後の農民が個人經濟にたいして不可避的に積極的な意欲をもつであろうことを十分に理解し、農民のそうした小所有者としての特徵をはっきりと頭に入れ、農民の個人經濟にたいする積極性を輕視したり、これを手荒い手段によってくじいてしまうようなことがあってはならないのである。そのために中農とかたく結びつく政策や富農經濟の存續をみとめる一方、富農の發展に制限を加える政策や小所有者としての農民の利益を保護する政策を、だんことして實行し、土地・財產にたいする農民の所有權を尊重しなければならない。[18]」と述べているのはこの農民の心理をよく理解している言であると思う。

然しこの農民の心理に妥協し、現狀で滿足してよいかと云えば決してそうではない。一九五三年度から第一次五ケ年經濟建設の段階に入った中國では、農業にも重大なる任務が課せられている。この工業建設と農業との關係は大きな問題であるが、これについて石礎の論じているものが注目される。[19] 彼は農業と工業との關係について、第一に農業は工業のため豊富なる食糧と原料を提供しなければならない。例えば小麥は一九五〇年に於て六六億斤の增產があり、棉花の栽培面積は五千畝の增加を見、國內で自給自足できるようになった。第二に農業の發達は農民の購買力を高め、工業のために市場を提供する。例えば東北では棉布の消費は一九四七年八十萬匹、四八年百二十萬匹、四九年三百二十萬匹、そして五〇年には九百萬匹と增加した。このように農民の購買力の增加は工業の發展に途を開くのである。第三には農業の發達の結果は、工業のための建設資金を提供する。それは、(一)從來地主が浪費していた資金が農民の手から建設に投ぜられ、(二)農民の富は城鄉交流によって生產手段・生活資料の購入に投ぜられることによって工業資

金を準備し、(三)農業生産力の發展に伴って食糧や原料を提供する外、茶・桐油・豚毛などの特産物の生産が高まり、これを海外に輸出することによって、海外より器材を購入する。五〇年度東北だけでもこれによって一億六千萬弗の外資を獲得した。第四に工業建設は多くの勞働力を必要とする。東北では國營企業だけでも、四九年度中に二十四萬人、五〇年度六月までに四十萬人の勞働者が增加した。農村は勞働の能率を高めることによって多數の勞働力を工業に提供しなければならぬ。と論ずるのである。

鄧子恢の報告によると、食糧の增產だけでも、今後二つの五ケ年計畫で一九五二年度の總生產高に對して七〇パーセント增產しなければならぬ。第一次五ケ年計畫の目標は三〇パーセント增である。この目標を達成するためには互助組・合作社の一層の發展を計り、農業の近代化を實現するより外に方法がないという。鄧子恢もいっているように、「個體農民が今ではもう重要な地位を占めていないとか、互助合作運動は短期間内にすべての農民を吸收することができるであろうとか、現在農民はすでにごく少數の例外をのぞいて、みんな集團農場の制度をうけいれうるようになっているというふうに考えるのは疑いもなく大きな誤りである。」四億六千萬の農民の四〇パーセントが互助組に參加し、而もその三分の二は臨時的な互助組であるのが實情である。決して現實を誇大にして考えたり、理想化してはならない。然し五年後に於て東北では合作社が基本的な形態となるのは一つのメルクマールである。そして恐らく五ケ年計畫の要求する增產はこれなくしては實現できないのであろう。私達は現實を理想化してはならないが、同時に又現實を正しく認識しなければならぬ。中國は徐々に漸進的に革命的な變化をとげつつあるのである。特に五ケ年計畫の進展はこの中國の發展に新らしい目標を與え、新らしい段階へと突入せしめた。[20]

地主の封建的搾取から解放された中國農民は、今や社會主義的農業の建設へと立ち上ったのである。

註

① 中國歷史上の農民戰爭について漆俠が次の如く論じている。

(人民日報、一九五三・六・三〇)

由於農民不是新的生產力代表者。不可能建立農民政權。他

們的起義。雖然「反對地主。可是擁護『好皇帝』」。由是在戰爭勝利的過程中。起義的領袖卽便出身於農民。也必然逐漸轉化爲地主。所以農民戰爭取得勝利。推倒舊的封建政權。但繼之而起的仍然是封建政權。秦末隋末元末三次全國性的農民大起義。就出現了漢唐明三個大帝國。而這三個統一的集權國家之所以强大。其經濟政治文化之所以發展高漲。主要由於農民戰爭的巨大力量掃蕩了腐朽的封建力量。使生產關係適合了生產力性質而形成的。因此。從這一重大意義上。我們稱漢唐明這三大帝國是農民戰爭勝利的結果。但韋立群同志說。「漢是大小地主領導農民搞出來的。」把漢帝國的一切成就都歸之於幾個地主分子的領導作用上。完全忽視了農民戰爭的推動作用。這也不正確的。

漢唐明の大帝國が經濟文化政治の上で偉大なる發展をなし得たのは、それが農民戰爭勝利の結果生れた國家であるからだという意見は注目に價すると思う。

②土地改革後の中國農村については、「我們參觀土地改革以後」(一九五一・北京刊)「一九五〇年中國經濟論文選第二輯(一九五一・北京刊)などが參考になる。これらの文獻には重要な報告が集錄されている。

③北伐當時の土地解放運動については、いうまでもなく毛澤東の「湖南農民運動考察報告」(毛澤東選集第一卷所收)が最も重要なる文獻であるが、その他に、

Anna Louis Strong; China's Millions.

がある。

④「土地法大綱」では富農の財產沒收については、その第八條に、

村の農民組合は地主の家畜・農機具・家・穀物その他の財產を接收し、さらに富農の餘剩の同樣財產をも接收する。これらは財產のない農民、その他の貧民に分配され、さらに等しい分量を地主に分配する。各人に分配された財產は各人の個有財產となる。

と規定している。

⑤「土地改革法」では富農の財產沒收について、

富農所有の自作地、また人をやとって耕作している土地、およびその財產を保護し、侵害してはならない。富農所有の小量の賃貸地もそのままにして手をつけない。ただしある特別の地域では、省以上の人民政府の認可をうけて、その賃貸地の一部または全部を徵收することができる。半地主型の富農が大量の土地を小作に出しており、それが自作地および人をやとって耕作している土地の量をこえるばあいには、その小作に出している土地を徵收しなければならない。

と規定する。

⑥劉少奇が一九五〇年六月十四日、人民政協第二次會議で行った、「關於土地改革問題的報告」(一九五〇年中國經濟論文選第二輯所收)を參照のこと。尙この問題については、尾崎庄太郎氏「中國に於ける農業改革の進展とその諸問題」(中國研究第十四號)という論文がある。

⑦廖魯言「三年來土地改革運動の偉大な成果」。(「中國に於ける人民民主々義の建設」所收)尙我が國で中國の互助組・合作

社の問題をいち早くとりあげたのは大阪市立大學の儀我壯一郎氏である。同氏の「新中國に於ける農業生産合作社の諸問題」(經營研究第七號)がそれである。合作社に何分にも一九五一年の春頃からぽつぽつ現われたのであり、中國獨特のものであるからその内容はなかなかつかめなかった。その具體的な經營内容が明らかになって來たのは漸く昨年に入ってからである。

⑧ 鄧子恢「農村工作的基本任務和方針政策。」(人民日報一九五三・七・二二及び人民中國第四號)

⑨ 役畜の場合も、その勞働分を決定しておく場合と、仕事の量に從って評價する場合がある。勞働分としては最高二十分、最低十分が適當とされている。(農業生産互助組參考資料第一集)

⑩ 「當前福建農業生産互助運動中等價交換問題的初步研究」「穩步前進中的任貴芳互助組」(農業生産互助組參考資料第一集)

⑪ 一九五二年末に開かれた東北農村工作會議で五年以内に農業生産合作社を農業生産中の基本的形式とすることが決定された。東北では互助運動が最も進んでいるので、このことが可能なのである。(人民日報一九五二・一二・二三)然るに中國經濟年報(二)では、これを以て直ちに「農業に於ける五ケ年計畫の骨子は、新式大型農具を使用する農業生産合作社を、農業生産の基本的形態とし」と規定したのは大きな誤りである。

⑫ 人民日報(一九五二・一一・二四)「『問題簍子』裡的問題是怎樣解決的—記郭玉恩農業生産合作社的成長。」

⑬ 人民日報(一九五三・三・三)「郭玉恩農業生産合作社爲什麼要實行『包工包産』制。」

⑭ 「關於一般村與較差村互助問題的商榷」(農業生産互助組參考資料第一集)

⑮ 「中共大名四區小湖村支部在互助合作運動中的宣傳工作」(農業生産互助組參考資料第一集)

⑯ 陝西省長治區の農民の間でその生活に餘裕ができて來ると共に個人經營に愛着をもつようになり、又山西省でも生産が向上すればそれだけ負擔が重くなり、又財産を蓄積しても結局共産になるというので、互助組に參加して增産する意欲に乏しいことが指摘されている。(「關於組織起來的情況與問題的報告」「山西農業生産成果及組織領導中的幾個環節」—一九五〇年中國經濟論文選第四輯。)

⑰ 「從湖北襄陽專區的情況看當前新區農村發展生産的一些障礙。」(人民日報、一九五三・四・一三)

⑱ 鄧子恢前掲報告。

⑲ この問題は過去二回に亘る現代中國學會大會の討論題目となった。石礎の論文は一九五〇年中國經濟論文選第二輯所收。

⑳ 昨年十月人民共和國成立四週年のスローガンにはじめて、全國人民一致努力。爲實現第一個五年計畫的基本任務而奮鬪。爲在一個相當長的時期内逐步實現國家的社會主義工業化。逐步實現國家對農村對手工業和對私營工商業的社會主義改造而奮鬪。と稱し、社會主義の實現を現實の課題として提起したことは重大である。新民主々義社會に於ける基本的矛盾は勞働者と資本家、農民と勞働者(農業と工業)である。社會主義工業の建設は農業の發展、集團化を要求する。中國農村は今後急速に變化することが豫想される。

The Collective Cultivation Movement in China

Yasuo Kitayama

The land reform is one of the biggest changes now being carried out in new China. It has been put into practice by the struggle of poor farmers and tenant-farmers against landlords. The latter class, which had ruled rural society since the Sung, has utterly disappeared, and there has now appeared the system of owner-tiller. Contemporary Chinese has not only succeeded in land-reform but also intends to go

further and to establish socialized agriculture by means of the cooperative movement. It is not easy to establish such a new rural system to lead the inadequately educated farmers who make up 80% of the whole population. They are strongly selfish and have several misconceptions of socialism. Yet socialistic reform will emerge from the present situation, because authorities say that the Five Year Plan requires a rapid increase in agricultural production, after five years Rural Cooperatives are expected to be standard system of agricultural production in Manchuria. We may assume that Chinese rural society is now in the course of a more rapid change than its has experienced in thousands of years.